盛岡地区かわまちづくりにおける市民参画の実践事例

小室　祐人[1]・南　正昭[2]

[1]学生会員　岩手大学大学院　総合科学研究科（〒020-8551 岩手県盛岡市上田四丁目 3 番 5 号）
E-mail: g0123024@iwate-u.ac.jp

[2]正会員　岩手大学　理工学部（〒020-8551 岩手県盛岡市上田四丁目 3 番 5 号）
E-mail: minami@iwate-u.ac.jp

近年，河川空間とまち空間を融合し地域の活性化に繋げるかわまちづくりの取り組みが推進されている．また，地域ニーズの原点である市民が主体となるまちづくりの重要性が問われ，このことはかわまちづくりにも言えると考えられる．本研究では，岩手県盛岡市の北上川流域での舟運事業に着目し，川を軸とした市民参画の地域づくりの事例について参与観察を行った．

研究を通して，取り上げた事例では公民連携が成功しており，関係各所との人と人の繋がりが強いことが分かった．また，それらを実現するために市民主体で活動できる環境が形成されていることが分かった．今後，市民参画によるかわまちづくり事業に求められる要件について更に深めていきたい．

Key Words: *kawamachizukuri, Kitakami-River, citizen-led*

1. はじめに

(1) 研究背景

近年，国土交通省では，河川空間とまち空間を融合し地域の活性化につなげるかわまちづくりの取り組みを推進し，各地で地域固有の資産を生かしたまちづくりが行われている[1]．

また，自治体と市民のそれぞれが主体となる協働によるまちづくりの重要性が問われている．このことは，かわまちづくりでも言える．一方，自治体と市民団体との繋がりの希薄さ[2]や，まちづくりにおける重要人物の不在[2]，不十分なリーダーシップ[3]により，市民主体のまちづくり事業に苦戦する事例もある．

本研究では，かわまちづくりの事例を基に，国や市と協働しながら市民が参画するかわまちづくり事業を行うために求められる要件を整理することを目指し，事例の参与観察と整理を行った．

(2) 研究目的

本研究では，対象地域でかわまちづくり事業として行われる市民主体の舟運事業（以下，盛岡舟運）について文献調査と参与観察を行い，盛岡舟運に関わる市民への調査を実施した．そして，市民参画によるかわまちづくり事業に求められる要件の一考察を行った．最終的には，市民参画によるかわまちづくり事業の実践に求められる要件を定めることを目指し，本研究ではその礎に求められる事項の整理を行った．

(3) 既往研究の整理

藪谷・椎野[4]は，まちづくりにおける市民団体の構成員の役割活動の類型化とモデル化を図っている．また，Lak・Kheibari[5]は発展途上国のイランを対象にまちづくりのプレイスメイキングにおける 6 分野 18 項目の評価基準を策定し，その基準を現地の事例を題材に用いることで評価基準の一般化を図った．泉ら[6]は水辺におけるまちづくり事業に必要な 5 つのアプローチと 15 のアクションを提示することで事業の働きかけや成長を促すために求められる項目を示した．このように，まちづくりに関して分野を絞って研究を行うことは多いが，それらを総合的に勘案してまちづくり事例を検討する研究は少ない．

本研究はまちづくりの一事例について市民の観点から整理すると同時に，市民参画のまちづくり手法を統合的に検討し，今後の市民参画のまちづくりのあり方を検討

する基礎的研究となり得る．そのため，本研究の社会的意義は大いにあると考えられる．

(4) 研究の流れ

まず，盛岡舟運と盛岡市の都市計画との関わりや盛岡舟運の現状より研究対象について明らかにした．次に，盛岡舟運の活動への参与調査と運営する市民へのヒアリング調査を行った．それらを基に，盛岡舟運が成功した要因を関係機関との連携の観点と市民団体の活発な活動の観点から考察し，市民によるまちづくり事業の実践手法の一考察を提示した．

2. 対象地域について

(1) 岩手県盛岡市の概要

岩手県盛岡市は，岩手県県央に位置する県庁所在地で，人口が 284,138 人（令和 5 年 5 月現在），面積が 886.47km^2 である．盛岡市は自然・歴史・都市・もてなしのあるまちとして「盛岡ブランド」[7]を掲げており，図-1 に示される中心市街地 [8]に「盛岡ブランド」が凝縮され，歩いて楽しいまちとなっている．

(2) 北上川の概要

盛岡市の中心市街地周辺には北上川，中津川，雫石川の三川が注いでいる．特に北上川は岩手県岩泉町を源流に宮城県石巻市までを注ぐ一級河川で，幹川流路延長 249km，流域面積 10,150km^2 の東北第一の大河 [9]である．

盛岡地区における北上川とその周辺（以下，盛岡地区北上川）は，江戸時代から大正初期までの約 300 年間，舟運が盛んに行われた [10]．北上川の舟運の起点は盛岡市内の新山河岸で，周辺の大慈寺地区には藩の年貢やその他の物資を収納する倉庫（御蔵）[10]が設けられていた．現在，大慈寺地区は，景観法（平成 16 年法律第 110 号）及び都市計画法に基づく景観地区に指定 [11]されており，盛岡町家や蔵，清水が現存している．

また，新山河岸から上流に進み，夕顔瀬橋から旭橋間の北東側の河川沿いに位置する材木町には，現在も川沿いに石組みがある．石組みについて大木 [10]は，「上流の山地から切り出された材木を中心にした物産と，下流から運ばれてきた商品が陸揚げされ，それらを商う商人たちが軒を並べていたのであろう」と推察している．

また，過去には水質問題にも苛まれた．大正 3 年に支川の赤川上流に松尾鉱山ができ，そこから流出する強酸性水で汚濁され，出鉱量の増加で北上川本川にも汚濁がおよんだ．昭和 20 年後半からは盛岡市付近で魚が生息できないほどになり，北上川は「死の川」となり人々は遠ざかった．清流化対策として，関係行政機関による坑廃水の処理事業が行われ，昭和 57 年には旧松尾鉱山新中和処理施設を作動させ，恒久的な処理が行えるようになった [12]．その結果，北上川が清流を取り戻しつつあり，現在では支川の中津川にて鮭の遡上が確認されている．

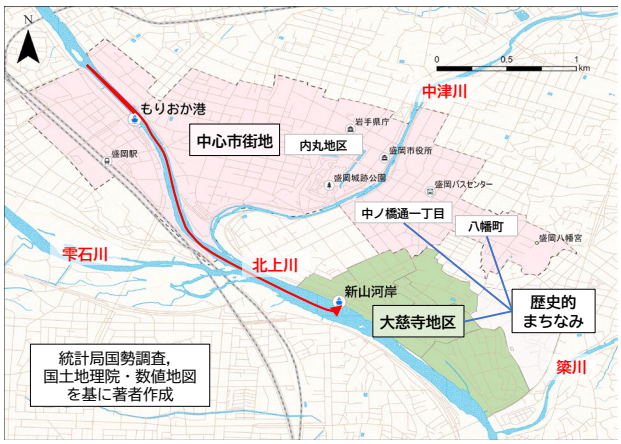


図-1 盛岡地区北上川と盛岡舟運の活動地域

(3) 盛岡地区北上川でのかわまちづくり事業

対象地域では，盛岡地区かわまちづくり懇談会が推進主体となり，「盛岡地区かわまちづくり」が，北上川と中津川で行われている [13]．特に盛岡地区北上川では，木伏緑地 Park-PFI 事業と盛岡舟運がある．

木伏緑地 Park-PFI 事業は，2019 年 9 月から公募設置管理制度（Park-PFI）で行われている事業である．木伏緑地に地元飲食店やオープンスペース，アウトドアキッチンを設置することでアクティビティや飲食を楽しめる公園づくりを行っている．

盛岡舟運は市民団体が主体となり，木伏緑地から下流の歴史的まち並みが広がる地点まで木造船を運航することで，川への親しみと同時に下船先でのまちづくり活動も合わせた事業である．起点の「もりおか港」と終点の「新山河岸」は，かわまちづくり事業で 2021 年に新たに整備された港である．

このように現在の盛岡地区北上川では，Park-PFI による公園再生とかわまちづくりが一体となり空間整備と活用がなされている．その結果，2022 年度に国土交通省が選定する「かわまち大賞」を「盛岡地区かわまちづくり」として受賞 [13]し，活動の先進性や効果が認められている．

3. 盛岡舟運について

(1) 盛岡舟運の概要

盛岡舟運では，「北上川を利活用し舟っこを運航する等，地域観光の振興を図り活力ある地域の形成に資すること」を目的に，大きく三つの活動が行われている．一つ目は，北上川での「もりおか丸」の運航である．ルートは図-1 の赤線で，舟を通して北上川周辺にある歴史，自然，都市を味わうことができる．また，舟の運航の際は船長による各ポイントの解説ガイドがあり，乗船客へもてなす工夫も施されている．二つ目は，下船地域での

回遊事業である．舟の運航は原則もりおか港から新山河岸までの片道運航で，乗船客へは下船地域周辺や盛岡市中心市街地を回遊しながら帰路につく仕掛けになっている．特に下船地域の大慈寺地区では，地域住民の協力の下で乗船客へお茶やお菓子のもてなしを行っている．三つ目は，かわまちづくりに関する勉強会の実施である．これは年に 1 回講師を招いて行われ，盛岡舟運に関係する歴史や河川に関して学ぶ場を設けている．また，「新山河岸」付近にて回遊する「開明丸」の運航も行い，2022 年度はイベント開催時に，2023 年度は定期運航の際に実施した．

(2) 盛岡市の都市計画と盛岡舟運との関係

盛岡市総合計画[14]での 2022～2024 年の戦略プロジェクトとして「盛岡地区かわまちづくり事業」が明記されており，盛岡市として盛岡舟運を重要視していることが分かる．また，盛岡舟運によって期待されている乗船客の回遊に関する事業も重要視されており，回遊地域の中心市街地に関連した事業や，回遊する行為に関連する事業も戦略プロジェクトの一事業とされている．このように，盛岡舟運の事業は盛岡市としても重要視している事業の一つであることが分かる．

盛岡舟運のルートで受けられる自然，歴史，都市，もてなしは，盛岡市の推進する「盛岡ブランド」の内容と合致しており，盛岡舟運に乗船することで「盛岡ブランド」を味わえる工夫がされていることが分かる．また下船後の回遊では，歩くことによる中心市街地内を繋げるきっかけや中心市街地へ乗船客が参画するきっかけの創出，盛岡の歴史や文化を伝えるきっかけになると考えられる．

これらより，盛岡舟運の一連の事業を通して乗船客への「盛岡ブランド」の提供や中心市街地の賑わい創出に寄与できると考えられ，盛岡舟運の事業の遂行が盛岡市の更なる発展に寄与すると考えられる．

(3) 盛岡舟運の組織形態について

盛岡舟運は，国土交通省岩手河川国道事務所・北上川ダム統合管理事務所（以下，河川管理者）と盛岡市（以下，自治体），北上川に舟っこを運航する盛岡の会（以下，舟っこの会）の三者による盛岡地区かわまちづくり（舟運）実行委員会（以下，実行委員会）によって行われている．特に舟っこの会は近隣で活動する商店会や町内会，NPO 法人など 9 団体で構成された法人格のない団体（以下，任意団体）で，盛岡舟運は舟っこの会が主体となって行われている．河川管理者や自治体は盛岡舟運の実施に関わる各種手続きへの助言や河川流量の調整への協力などを行っている．

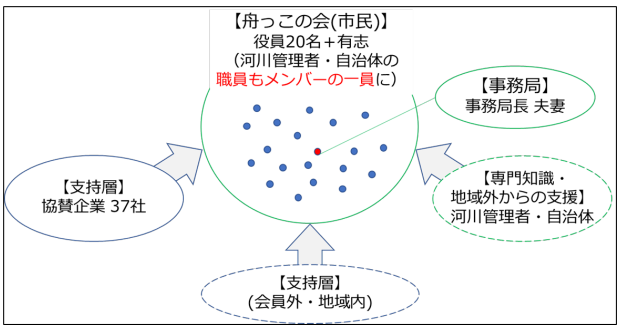


図-2 盛岡舟運の組織関係イメージ

事務局の機能は事務局長が自主的に担っている．また，事務局は事務局長の経営する会社の事務所となっている．なお，業務内容に関しては事務局長妻も手伝っており，事務局長だけでは対応できない点は河川管理者や自治体，他のメンバーへ積極的に相談しながら行っている側面もある．

活動資金は，助成金と会員，賛助会員，協賛企業からの協力金，乗船客が支払う運航協力金，各種財団や自治体の助成金である．なお，利益は全くでておらず，メンバーは非営利のボランティアとして活動に参加している．

以上の事項を澤村[15]の分類を参考に整理すると，盛岡舟運の組織形態は図-2 の通りなる．

4. 盛岡舟運への参与観察

2022 年度の盛岡舟運の活動の現場へ一市民として参加する参与観察を表-1 の通り実施した．なお，対面で行われた舟っこの会または実行委員会が主催する活動についてのみ記している．

また，盛岡舟運の現状を把握するために，舟っこの会の運営メンバーと事務局へのヒアリングを実施した．

表-1 盛岡舟運への参与調査

	参与調査	活動内容
2022年4月15日(金)		役員会
2022年5月14日(土)	○	川開き・舟運無料運航（運航①）
2022年5月25日(水)		役員会
2022年5月28日(土)	○	運航実習（運航②）
2022年6月8日(水)		役員会
2022年6月11日(土)	○	運航実習（運航③）
2022年6月18日(土)	○	第５回北上川フェスタIN MORIOKA（運航④）
2022年6月25日(土)		運航実習（運航⑤）
2022年7月23日(土)	／	（運航中止（運航⑥））
2022年8月16日(火)	／	（運航中止（運航⑦））
2022年8月27日(土)	／	（運航中止（運航⑧））
2022年9月10日(土)		運航実習（運航⑨）
2022年9月24日(土)	／	（運航中止（運航⑩））
2022年10月8日(土)	○	バスセンター開業記念運航実習（運航⑪） 安全運航委員へのヒアリング実施
2023年2月18日(土)	○	「盛岡地区かわまちづくり（舟運）」講演会

5. 舟っこの会運営メンバーへのヒアリング調査

(1) 調査概要

下記の通り，安全運航委員会の方から意見を集めた．

・日　　時：2022 年 10 月 8 日（土）運航実習後
・回 答 者：安全運航委員会 8 名
・内　　容：「舟っこイベントへの思いと今後に期待すること」について，付箋一つにつき 1 枚の意見を自由に書いていただき，用意した模造紙上に貼り付けていただいた．
・有効回答数：128

集めた結果を Lak・Kheibari [5]と泉ら [6]の二つのフレームワークで分類し，それぞれについて川喜田 [16]が提唱する KJ 法 AB 型で整理し考察した．

(2) 調査結果

整理したことで分かった四つの事柄について整理する．

a)取り組む姿勢

運営メンバー自身が楽しく行動する点や根気強く活動に取り組む点が挙げられ，それに関するフレームワークへの意見が多かった．具体的には，企画する側が楽しく活動していたり，活動が労働に関係しない老後の楽しみの一つとして取り組んでいたりしていることが分かった．また，活動の壁にぶつかっても皆で知恵を出し合って意見を出し合うことで根気強く活動に取り込む姿勢があることも分かった．これらより，運営メンバーの活動へ取り組む姿勢の高さがあることが分かった．

b)個人の思い

「最高の仲間」，「良い仲間」，「考えの違う人が集まる」といった運営メンバー同士の繋がりについての意見が出てきた．また，フレームワークに当てはめた際に運営メンバー間に関する意見が少なく見られたが，それは KJ 法 B 型文章より運営メンバー同士の強い繋がりが潜在的にあるためだと考えられる．これより，運営メンバー同士の繋がりが強いことが分かった．また，盛岡舟運の活動を通して新たな発見を得られることへの思いや，利用者の笑顔を見たくて活動を行っているとの意見も多く出てきた．これらより，運営メンバーが活動へのやりがいを持つきっかけとなるものがあることが分かった．

c)共通の考え

盛岡舟運を通して盛岡の歴史や自然の豊かさを広めたいという意見があり，それに関するフレームワークへの意見が多かった．これより，運営メンバーが舟っこの会の活動目的について共通認識を持っていることが分かった．また，盛岡舟運を盛岡のシンボルにしたいという意見やそれに関連したフレームワークも多くあり，運営メンバーが今後の活動への意欲も高いことも分かった．これより，運営メンバー同士が活動へ共通した考えを持っていることが分かった．

d)安全管理

ブレインストーミングを通して，安全管理に関する意見が非常に多く出てきた．先行研究のフレームワークでは安全に関するフレームワークがあったが，泉らのフレームワークでは直接的なフレームワークが無いが，安全に関する意見の多さから盛岡舟運においては安全に関する意見が重要になることが分かった．

6. 舟っこの会事務局長へのヒアリング調査

(1) 調査概要

下記のとおり，舟っこの会および実行委員会の事務局長へヒアリング調査を行った．

・実施日時：2022 年 11 月 25 日(金) 14：00～16：00
　　2023 年 1 月 31 日(火) 14：00～16：30
・対　　象：舟っこの会および実行委員会の事務局長
・調査目的：舟っこの会の歴史や現在の活動内容，今後への期待などについて伺い，事務局長の舟っこの会に対する思いや考え，舟っこの会の活動が成功している要因の一要素を明らかにする．
・実施場所：舟っこの会　事務局
・実施方法：半構造化インタビューによるヒアリング（聞き取り）調査

(2) 調査結果

ヒアリング調査により分かった六つの事柄について整理する．

a) キーパーソンの行動力

事務局長によると，舟っこの会の設立の発端は後の初代会長と事務局長との飲みの場で，その後も飲みの場を活用した設立が短期間でなされていたことが分かった．

発端は，2015～2016 年頃に後の初代会長と事務局長との飲みの場で，昔の北上川にあった舟運文化を復活させ，人々を舟に乗せたいという構想を話していたことであった．その構想を実現させたく，2016 年 11 月 29 日に飲み会と称して両者の知り合いの市民 13 人で任意の初会合を実施し，そこで意見を募った．募った内容は後の事務局長が随時整理していた．そして，2016 年 12 月 21 日に後の顧問からの助言を基に会の設立を決定し，初会合から 3 ヶ月後の 2017 年 2 月 15 日に舟っこの会が設立した．これより，舟っこの会の設立は飲みの場がきっかけで，行動に移してからわずか 3 ヶ月の短期間で設立したことが分かった．

これらより，舟っこの会の初代会長と事務局長（以下，キーパーソン）において，すぐに実行する行動力の高さがうかがえる．

また，活動を進めるにあたり，舟の購入や操縦者の確保，河川管理者への手続きなどを行う必要があり，構想を実現させるまでに多くの苦労をしていたとうかがえる．しかし，事務局長は発足当初は苦労する点を一切気にせず実行に移し，活動における壁に当たったらそのときに解決策を考えるようにしていたことが分かった．事務局長自身は，事前に実現までに苦労する多くの点を知っていたら実行に移していなかったかもしれないとも述べており，専門的なことを知らなかったからこそ現在まで活動を続けてこられたことが分かった．

以上のことより，キーパーソンのすぐに実行に移す力と活動を後先考えず行う実行力があることが分かった．

b)キーパーソンの交友関係

a)で述べた舟っこの会の歴史より，キーパーソンによって仲間をすぐ集められた点から，キーパーソンの仲間集めの力の大きさがうかがえた．

また，オフシーズン中は 1～2 週間に 1 度，シーズン中はそれ以上に運営メンバーの誰かが事務所に来て，活動内容についての意見交換や何気ない雑談などを楽しんでいることが分かった．このようなところから，運営メンバーの皆が気楽に事務局に顔を出し，積極的に活動への意見交換や各々の関係性の維持を図っていることが分かった．

以上のことより，キーパーソンの仲間集めの力の大きさとメンバーが頻繁に事務局へ訪れ，キーパーソンの人脈の多さがうかがえた．

c)キーパーソンのまちへの思い

事務局長へのヒアリングを通して，活動開始当初から盛岡駅前と歴史的街並みを繋げる活動をしたい思いがあったものも，活動を進めるにつれて盛岡市の自然，歴史，都市の良さを再認識でき，この盛岡の良さを発信したいという強い思いをお持ちであることが分かった．また，盛岡の文化を更に発信したい思いもあり，郷土愛があるからこそ活動を行えているとも述べており，元会長もそのように仰っていたことも分かった．

このように，事務局長自身が活動へ深い思いや郷土愛を持ち，舟っこの会の活動へ非常に大きな意義を見出せていることが分かった．

d)メンバー同士の緩い繋がり

メンバー間の繋がりが厳密な組織化されておらず，緩い繋がりである点が見られた．運営メンバーの人数について伺った際に，役員と安全委員会に加え，積極的に関わるメンバーが数人といった具合でしか把握していないとの話を伺った．運営メンバーの人員の把握は組織のマネジメントにおいては必須であるが，舟っこの会では曖昧になっている．この点は組織のマネジメントでは課題点と見られる事項だが，そのような状況でも組織が成功しているのは活動に何かしらの要因があると見られる．

e)各機関の特性を生かした協力

3 章で指摘した通り，実行委員会内で業務内容の協力や連携がなされていることが分かった．具体的には，河川管理者や自治体は河川の流量調整や各種手続きの助言を行い，舟っこの会はその他の活動の企画や運営を行っていることが分かった．このことは，市民に難しく感じる部分へ河川管理者や自治体が協力することで，舟っこの会は活動の企画や運営に全力を尽くせるため，事務局長はこの点を歓迎されていた．このように，市民が活動を楽しく長期的に行えるためには各機関の特性を生かした連携が重要で，特に市民の意思に反する庶務に対する連携が重要であることが分かった．

f)各機関の職員が一人の市民として参加

河川管理者や自治体の職員が異動になった後も一人の市民として関わっている特徴があることが分かった．事務局長へのヒアリングにて，過去に河川管理者や自治体にて「盛岡地区かわまちづくり」に関係する担当部署で従事していた職員が，部署が異動になった現在も一人の市民として役員と同等の活躍をしていることが分かった．また，役員と同等の活躍まではいかなくても，過去に関わった河川管理者や自治体の職員が盛岡舟運のイベントに来ることも分かった．このことより，各機関の職員が一人の市民として関わっている点が分かった．

g)肩書きを気にしない会合

舟っこの会では会合を頻繁に開き，実行委員会としては新年会の際，1 年に 1 回開く総会，打ち上げ会（納会）の際の全 3 回行い，安全委員会内では舟運運航の都度に慰労会も兼ねた会合を実施している．これより，舟っこの会では会合を頻繁に行っていることが分かる．

また，a)で述べた舟っこの会の歴史より，初会合が飲み会を称して実施された点から，舟っこの会の会合では，気楽に参加しやすくする環境が形成されていることがうかがえた．

それ以外にも，事務局長へのヒアリングによると，実行委員会主催以外の会合では現地で活躍している仲間同士の結束力を高めたり，メンバー同士の強みと協力してほしいことを認識し合ったりするために行っていることが分かった．実行委員会主催での会合では，河川管理者や自治体の長に相当する方も出席することがあり，現地で活躍している河川管理者や自治体の職員が萎縮する危険性がある．そのため，実行委員会主催以外の会合では現地で活躍している仲間で集まり，各々が所属する組織の上下関係を気にせず，一人のメンバーとして参加できるように工夫している．また，運営メンバー同士がそれぞれの肩書きを気にせずに，皆が同じ一人の市民として

助言や意見ができる環境にもなっている．それ以外にも，会合を通して，各々の普段の仕事内容や舟っこの会の活動に対する思い，各々の強みや協力してほしいことなどを共有できる特徴があり，普段の活動では話せないことを伝えあえることも分かった．これより，肩書きを気にせずに話を交わせる会合においては，互いの特性を認識し合える利点があることが分かった．

以上のことより，気楽に参加できる会合を頻繁に実施する点，会合を通して肩書きを気にせずに互いに助言や意見をしやすくしている点が見られた．

7． 盛岡舟運の現状の整理と考察

本研究で出てきた研究結果を整理したものを表-2，表-3 に示す．研究結果を基に，盛岡舟運の現状の整理と考察を行った．検討にあたっては，公民連携の観点と，関係機関同士の人と人の繋がり，市民主体で活動を行える環境の形成の 3 観点から行う．

表-2 5 章(2)舟っこの会運営メンバーへのヒアリング調査結果

小見出し	内容
a)	取り組む姿勢
b)	個人の思い
c)	共通の考え
d)	安全管理

表-3 6 章(2)舟っこの会事務局長へのヒアリング調査結果

小見出し	内容
a)	キーパーソンの行動力
b)	キーパーソンの交友関係
c)	キーパーソンのまちへの思い
d)	メンバー同士の緩い繋がり
e)	各機関の特性を生かした協力
f)	各機関の職員が一人の市民として参加
g)	肩書きを気にしない会合

(1) 公民連携

盛岡舟運において関係機関との連携が円滑にできており，その理由として公民連携が成功している点が考えられる．

6 章(2) e)より，河川管理者や自治体が河川管理や事務的な手続きを担い，その他の盛岡舟運の企画や運営は全て舟っこの会で担っていることが分かり，これより実行委員会内で舟っこの会と河川管理者や自治体との役割分担がされていることが見られた．他の事例では，かわまちづくりにおいては実施主体の市民団体と河川管理者や自治体との連携が希薄であったり，市民のキーパーソンが不在だったりする場合が多い．しかし，盛岡舟運では，河川管理者や自治体は盛岡舟運の企画自体には大きく関与せず，市民主体で活動を遂行しており，他事例では生じる課題を解決していると考えられる．

これより，盛岡舟運において関係機関との連携が成功している理由の一つに，実践し難い市民主体のまちづくり，すなわち公民連携が実践できている点が考えられる．

(2) 人と人の繋がり

盛岡舟運において関係機関との連携が円滑にできている理由として，(1)以外に関係機関との連携手法が工夫されている点も考えられる．

6 章(2) f)より，河川管理者や自治体の職員が異動後も一人の市民として活動に参加していることが分かった．他事例では，かわまちづくり事業では実施主体の市民と河川管理者や自治体との連携が希薄な場合が多い．盛岡舟運においても連携当初は舟っこの会，河川管理者，自治体の三者の組織間の関係でしか過ぎず，お互いが「河川管理者の担当者さん」のような，組織の一担当者の認識であったと思われる．しかし，現在は河川管理者や自治体の職員が一人の市民として関与しており，各々が組織の肩書きでなく「〇〇さん」といった個人名で認識しあっていることがうかがえる．よって，舟っこの会での他組織との連携手法が，活動するにつれて組織間の繋がりから個人間の繋がりへと変化したと考えられる．

その他に，舟っこの会の観点だと事務的な事項の行い方へ助言を得られる場となり，河川管理者や自治体の観点だと市民からの正直な意見を得られる場となり，双方が高めあえる環境になっていると考えられる．また，部署異動した後も舟っこの会の活動に関与しようとする点から，河川管理者や自治体の職員にとっても舟っこの会の活動環境が良いのと同時に，継続した連携が行いやすくなっているとも考えられる．

これらより，盛岡舟運において関係機関との連携が成功している理由の一つに，実行委員会内の人と人の繋がりが強く，市民と河川管理者や自治体の双方が高めあえる場の形成が行われている点が考えられる．これらの流れを図-3 に示す．

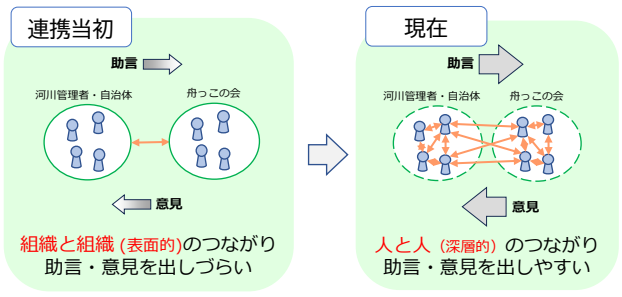


図-3 舟っこの会の連携手法の変化

(3) 市民主体で活動できる環境

(1)と(2)を通して，盛岡舟運の活動を関係機関との連携の観点から考察すると，公民連携を実践できており，実行委員会内の人と人の繋がりが強いためだと考えられた．しかし，これらの事項は舟っこの会の活動への活発さがなければ成し遂げられない事項だと考えられる．公民連携が成功するためには，市民が主体となった活動が不可欠であるだろう．また，実行委員会内の人と人の繋がりを強めるためには，舟っこの会の体制自体が重要であるだろう．そのため，市民主体で活動を行える環境が重要であると考えられる．その理由を，誰もが発言しやすく活動に関与しやすい環境が形成されている点，活動の軸が明確で活動目的について皆が共通認識を持っている点，キーパーソンである事務局長の行動力が高い点の 3 点から考察する．

a) 活動へ関与しやすい環境

6 章(2) a) より舟っこの会の設立は飲み会が重要な役割を担い，6 章(2) g)より設立後は会合を積極的に行っていることが分かった．これより，舟っこの会の活動への参加のきっかけとして，活動の意義に共感して携わるだけでなく設立時の飲み会や設立後の頻繁な会合の場への楽しみもあり，活動への参加の敷居を下げられていると考えられる．また，5 章(2) a)より企画する側が楽しく活動していたり，活動が労働と関係なく人生の楽しみの一つとして取り組んでいたりすることが分かった．これらより，活動へ対してメンバー自身の楽しさややりがいを見出していると考えられる．

以上より，舟っこの会の活動が活発な理由の一つとして，会合によって舟っこの会の活動へ参加する敷居を下げられていたり，運営メンバーが活動に対して楽しさを持っていたりすると考えられる．

また，そのような目的が多く思われる環境でも活動が成功している理由として，以下の 2 点が考えられる．

1 点目は，難しいことを考えすぎないで活動していることである．6 章(2) a)より，活動を進める際に，生じると思われる懸念点を考慮することなく，専門的な知識なしで活動を進めていったことが分かった．専門的な知識を兼ね備えた人が同様の活動を行おうとすると，活動を進めるにあたっての河川管理者や自治体との協議や資金面や資材面の苦悩を勘案し，なかなか実行に移せないだろう．しかし，活動開始当初の舟っこの会には専門的な知識を兼ね備えた人材が非常に少なく，活動しながら懸念点を見つけ，その都度検討していた．そのため，専門的な知識によって活動構想が却下されることが比較的少なく，突拍子もないが通りやすい環境であったため，難しいことを考えずに純粋な思いや考えを発言できる環境が形成されたと考えられる．

2 点目は，皆が対等に話せる場が形成されていることである．6 章(2) g)より，会合が運営メンバー同士の肩書きを気にせずに，皆が同じ一人の市民として意見を言い合える環境になっていることが分かった．また，樋口 [17] はかわまちづくりの進め方について整理した際に，議論や合意を行う一つの手法として，「酒をくみつつじっくり議論をかさねることで，わだかまりや立場の壁を取り払う」をあげており，飲み会の場によって参加者が対等な立場になり得ることを示唆している．これらより，設立時の飲み会や設立後の頻繁な会合によって運営メンバーが対等に話せる場になり，各々の意見を素直に発言しやすい環境が形成されていると考えられる．

よって，舟っこの会の活動が活発な理由の一つとして，，設立時の飲み会や設立後の頻繁な会合によって舟っこの会の活動へ参加しやすくなっていたり，運営メンバーが活動に対して楽しさややりがいを持っていたりすることが考えられ，それらによって誰もが発言しやすく活動に関与しやすい環境が形成されていると考えられる．

b) 活動の軸

5 章(2) c)より，運営メンバーが活動に対して共通した思いを持っていることが分かった．また，その共通している意見は，舟っこの会の活動目的である「北上川を利活用し舟っこを運航する等，地域観光の振興を図り活力ある地域の形成に資すること」と合致しており，皆が活動目的を十分に理解していることが分かる．これより，運営メンバーが活動目的を共通認識として理解しており，皆が活動目的の達成に向けて活動に邁進していると考えられる．それ故に，5 章(2) a)で示した活動の壁にぶつかっても皆で同じ目的に向かって根気強く活動を行うことができ，達成感や達成までのプロセスによって 5 章(2) b)で示した運営メンバー同士の繋がりや活動のやりがいを形成できると考えられる．そのため，現在まで構成団体やメンバーが抜けることなく，6 年間継続して活動を行えているのだろう．

よって，舟っこの会の活動が活発な理由の一つとして，a)で示した敷居が低いだけでなく，活動の軸が明確で，活動目的について皆が共通認識を持っていることが考えられる．

c) キーパーソンの行動力

5 章(2) a)および 5 章(2) b)の事項を行えた要因の一つに，キーパーソンである事務局の行動力の高さが大きく関係していると考えられる．

6 章(2) a)より，設立時に初会合をすぐに行えたキーパーソンの行動力の高さや，事務局の業務を事務局長が主体となって担う積極性が見られた．また，6 章(2) b)よりキーパーソンによる仲間を集める力の大きさがあり，多くの人からの信頼性があると考えられた．それ以外にも，6 章(2) c)よりキーパーソン自身の活動への熱い思いがあ

ることが分かった．これらより，キーパーソンの活動への積極的な姿勢と信頼のおける人柄と行動力があると考えられる．

この人柄と行動により，舟っこの会の活動に大きく三つの効果がもたらされると考えられる．

一つ目は，とりまとめる存在が明確であることによる組織の信頼性の高さである．舟っこの活動の特性上，河川管理者や自治体，その他協力機関との協力が不可欠である．澤村 [15]より，事務局長が事務局を担う形態にすることで，責任の所在や連絡先が明確になり，関係機関とのやりとりが円滑に進む特徴があることが分かる．また，5 章(2) d)の通り，安全管理においても事務局長が協力しながら安全運航委員会が主体となって各種対応を行っており，乗船客へ水難事故に対する不安感を与えないように十分な対策をされている．このような組織として明確な場所と人材と基本的な活動があることが，ひいては組織としての信頼性の高さに繋がると考えられる．

二つ目は，事務局自体の敷居が低い点である．6 章(2) b)の通り，メンバーが気楽に事務局へ訪れる環境が形成されていることで，活動への思いや意見を気楽に情報交換できており，運営メンバーから活動への不安や不信感が生まれなくなっていると考えられる．また，運営メンバーが頻繁に訪問することで運営メンバーと事務局長との間での信頼感も生まれ，活動への正直な意見を交換できるようになっているとも考えられる．このような事務局へ気楽に来られる敷居の低い雰囲気が，ひいては 6 章(2) f)のような気楽に参加しやすい環境を形成していたり，5 章(2) a)および 5 章(2) b)のような運営メンバーの活動への意欲の向上や維持に貢献していたりすると考えられる．

三つ目は，事務局と運営メンバーや河川管理者，自治体との平時からの頻繁なやりとりである．一つ目や二つ目の内容と類似するが，事務局での活動で出てきた活動や各種手続きにおける疑問点は，すぐに運営メンバーや河川管理者，自治体へ意見や協力を仰ぎ，不明点はすぐに解決する行動力があると考えられる．このような平時からの頻繁なやりとりにより，事務局長以外の運営メンバーはもちろん，河川管理者や自治体も活動内容を詳細に理解し合えるため，舟っこの会内部や外部との風通しが良いと考えられる．

このように，キーパーソンである事務局長の行動力が高いため，舟っこの会の活動が円滑にそして活発に行えていると考えられる．

(4) 盛岡舟運の現状の総合的な整理

以上のことより，盛岡舟運では公民連携を実践できており，実行委員会内の人と人の繋がりが強いためだと考えられた．また，市民主体で活動を行える環境として，誰もが発言しやすく活動に関与しやすい環境が形成されている点，活動の軸が明確で，活動目的について皆が共通認識を持っている点，キーパーソンである事務局長の行動力が高い点が考えられた．

これらの事項を通して，現状の盛岡舟運の優位な点として，市民主体で，関わる人すべての個人と個人のつながりを重視し，皆が対等に接することができ，参加しやすく続けやすい環境の存在があると考えられる．

8. おわりに

(1) 研究のまとめと結論

本研究では，市民参画によるかわまちづくり事業の実践に求められる要件を定めることを目指し，礎となる事項について盛岡舟運での参与調査の結果を基に整理した．参与調査では舟っこの会の運営メンバーと事務局へのヒアリング，イベント来場者へのアンケート調査を行った．

それらを整理した結果，盛岡舟運では公民連携が成功しており，関係各所との人と人の繋がりの強さがあることが分かった．また，それらを実現するために市民主体で活動できる環境が形成されていることが分かった．

最終的に，現状の盛岡舟運の優位な点として，市民主体で，関わる人すべての個人と個人のつながりを重視し，皆が対等に接することができ，参加しやすく続けやすい環境の存在があると考えられた．

(2) 今後の展望

本研究では，活動に主体的に関わっている市民の観点から研究を行った．今後は，イベントへ来場した市民や河川管理者，自治体の観点からも研究を行い，多様な観点から事例について検討する必要がある．また，盛岡地区かわまちづくりの一連の事業は現在も行われているため，今後も継続的に参与観察する必要があるだろう．

謝辞：本研究の遂行にあたり，北上川に舟っこを運航する盛岡の会，国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の皆さまから調査の協力や有益な助言を賜りました．ここに記して御礼申し上げます．

REFERENCES

1) 国土交通省：「かわまちづくり」支援実施要綱，https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/machizukuri/shienseido/shienseido_r50401.pdf (2023/10/13) [Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism : 'Kawamachizukuri' Support implementation guide-lines,https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/machizukuri/shienseido/shienseido_r50401.pdf (2023/10/13)]

2) 阿部充ほか：全国アンケートからみた「かわまちづくり」の現状と課題，リバーフロント研究所報告，31 号，pp.37-46，2020.[Abe, M. et al : Current state of community development utilizing rivers and challenges ahead identified from a national questionnaire survey, Report of Riverfront Research Institute, Issue 31, pp.37-46, 2020.]
3) 田邉信男，氏原岳人，阿部宏史：継続的なまちづくり活動に向けた組織運営の課題とマネジメントの方策に関する考察-活動者の観点に基づく分析-，都市計画論文集，51 巻 3 号，pp.553-559，2016.[Tanabe, N. Ujihara, T. and Abe, H. : Issues on the management of voluntary organizations for continuing activities of town development from the point of view of operation directors, Journal of the City Planning Institute of Japan, Vol.51 Issue 3, pp.553-559, 2016.]
4) 藪谷祐介，椎野亜紀夫：まちづくり市民活動団体の役割構造のモデル化，日本建築学会計画系論文集，86 巻 781 号，pp.961-970，2021.[Yabutani, Y and Shiino, A. : Modeling the role structure of community action groups, J.Archit. Plann., AIJ, Voll. 86 Issue 781，pp.961-970，2021.]
5) Azadeh Lak, Shohreh Zarezadeh Kheibari：Towards a framework for facilitating the implementation of Tactical Urbanism Practices: Assessment Criteria in the Place-making Approach in Iran，Geoforum，Vol.115，pp.54-66，2020.
6) 泉英明，嘉名光市，武田重昭：都市を変える水辺アクションー実践ガイド，pp.9-15，学芸出版社，2015.[Izumi, H. Kana, K. and Takeda, S. : Toshi wo kaeru mizube akushon – zissen gaido , pp. 9-15, Gakugei shuppansya, 2015.]
7) 盛岡市：第二次盛岡ブランド推進計画，pp.5-7，2015.https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/034/354/keikaku.pdf (2023/10/13)[Morioka city : Dainizi Morioka-brando suishin keikaku, pp5-7, 2015. https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/034/354/keikaku.pdf (2023/10/13)]
8) 盛岡市：中心市街地活性化つながるまちづくりプラン(盛岡市中心市街地活性化基本計画)，pp.2，2022. https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/624/R4planx.pdf (2023/10/13) [Morioka city : City Center Revitalization Tsunagari Machizukuri Plan (Morioka City Basic Plan for the Revitalization of the City Center)，pp.2，2022. https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/624/R4planx.pdf (2023/10/13)]
9) 国土交通省水管理・国土保全局：日本の川-東北-北上川，https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0204_kitakami/0204_kitakami_00.html (2023/10/13) [Ministry of Land, Infrastructure : Japam river-Tohoku-Kitakami river, https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0204_kitakami/0204_kitakami_00.html (2023/10/13)]
10) 大木昌：北上川の舟運と流域生活圏の形成，明治学院大学国際学研究，52 号，pp.23-37，2018.[Oki, A. : The Formation of Regional Communities through River Navigation on the Kitakami River, Meiji Gakuin review International & regional studies, Issue 52, pp.23-37, 2018.]
11) 盛岡市：大慈寺地区景観地区の解説，pp.3-15，2012. https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/010/231/keikantikukaisetu.pdf (2023/10/09)[Morioka city : Daizizitiku keikanntiiki no kaisetu, Morioka city, pp.3-15,2012. https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/010/231/keikantikukaisetu.pdf (2023/10/09)]
12) 建設省東北地方建設局岩手工事事務所：北上川を清流に，建設省東北地方建設局岩手工事事務所，pp.24-25，1996.[Ministry of Construction Tohoku Regional Construction Bureau Iwate Construction Office : Kitakamigawa wo seiryu ni, Ministry of Construction Tohoku Regional Construc-tion Bureau Iwate Construction Office, pp.24-25, 1996.]
13) 国土交通省：Press Release - 令和４年度『かわまち大賞』を決定しました，https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001578944.pdf (2023/10/13) [Ministry of Land, Infrastructure : Press Release - "Kawamachi Taishou" for 2022 has been decided，https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001578944.pdf (2023/10/13)]
14) 盛岡市：盛岡市総合計画[実施計画]2022-2024 ひと・まち・未来が輝き世界につながるまち盛岡，pp.185-193，盛岡市，2022.[Morioka city, Morioka-shi sougou keikaku [zisshi keikaku]2022-2024 hito・machi・miraigakagayakki Sekai ni tsunagaru machi Morioka, pp.185-193, Morioka city, 2022.]
15) 澤村明：新潟大学マネジメントスクール研究叢書 2 まちづくり NPO の理論と課題，pp.109-111,118-121,124-127，渓水社， 2004.[Sawamura, A. : Niigata Daigaku Maneziment Sukuuru Kenkyuu Sousho 2

Machidukuri NPO no Riron to Kadai, pp.109-111,118-121,124-127, Keisui-sha, 2004.]

16) 川喜田二郎：発想法，pp.65-114，中央公論新社，1967．[Kawakita, J. : Hassouhou, pp.65-114, Chu-okoron-sinsya, 1967]

17) 樋口明彦，川からのまちづくり研究会：川づくりをまちづくりに，pp.174-175，学芸出版社，2003.[Higuchi, A. and Kawakaranomachidukuri-kenkyuukai. : Kawadukuri wo machidukuri ni, pp.174-175,Gakugei Shuppansha, 2003.]

A Practical Case Study of Citizen Participation in Kawamachizukuri in Morioka City

Yuto KOMURO, Masaaki MINAMI

In recent years, kawamachizukuri has been promoted to revitalize the community by linking the river space with the town space. In addition, the importance of citizen-led community development, which is the starting point of local needs, has been inquired, and it is believed that this is also true for river town development. In this study, we focused on the Moriokasyuun in the Kitakami-River basin in Morioka City, Iwate Prefecture, and conducted participant observation of a case study of citizen-led community development based on a river.

Through this research, we found that the cases have been successful in public-private partnerships, and there are strong individual connections with the various parts of the community involved. In addition, it was found that a space for citizen-led activities has been formed to realize these partnerships. In the future, we would like to further deepen the requirements for citizen-led river town development projects.